

有機農業・山口農園 法人化から16年 苦難からたどり着いた7分業制

宇陀市 有限会社山口農園

代表取締役 山口貴義さんに聞く



有限会社山口農園(宇陀市榛原大貝332)が法人化したのは、平成17(2005)年3月。圃(ほ)場面積は10万5000平方メートル、ハウスの数は165棟。ハウス内での有機農業一筋に、数々のシステムづくりを手掛けてきた代表取締役山口貴義さん(48)は、農業では珍しく生産、調整など7部門の分業制による従業員58人の組織を作った。同農園の研修生を次々と独立させ、地域の遊休地・荒廃地を無くし、行政から高い評価を受けている。また新規就農者を独立支援する山口農園グループの取り組みが1昨年、優良経営体の担い手育成分野で農林水産大臣賞を受賞した。年間を通して10種の有機野菜を着実に消費者に送り届け、コロナ禍にあっても収益を伸ばし続けている。「グループで全国展開し、有機野菜の産地リレーをしたい」と目を輝かせる山口さんに、将来ビジョンなどについて聞いた。

「なぜ有機農業をやる決心をしたのですか。」

元々民間企業でサラリーマンをしていたのですが、結婚を決意したとき当時ブラック企業から脱出するため地方公務員試験を受け、平成9(1997)年に県庁職員になり、翌年には農家の2人姉妹の長女の妻と結婚しました。

もともと義父がやっている農業の形が、農薬や化学肥料を全く使わない有機農業でした。その姿を見て、有機農業なら人間の身体には安全・安心だし、農業で地域や環境を守る素晴らしい仕事だと思っていました。

「山口さんに何か変化があったのですか。」

家業を企業にすることでなかなか理解を得られず、義父と何度も衝突を繰り返しました。このままでは家族崩壊になると思い、平成20(2008)年に山口農園を退職して、農水産資材を開発・販売する大手農産資材会社に就職したのです。

山口農園の従業員は25人の組織になっていましたが、社内に人が絡む問題が多発しており義父や義弟から何度も「帰ってきてほしい」という電話があつたんです。再就職した会社は、毎日が楽しくもすくなく良い会社だったので悩みました。しかし、嫁さんの実家でもあり放っておけないと思いましたが、一つだけ戻る条件を付けました。

「その条件とは。」

それまで会議は全くないゆるゆるワンマン経営だったんですけど、それが上手くいかない原因だと分かっていたので、月次会議をつくって、そこで決めたこと中心に

その義父からある日突然「一緒に会社を立ち上げてくれませんか」と声が掛かって色々悩んだ結果、6年間務めた県庁職員を辞めました。

「新鮮野菜の早朝の収穫は大変だったのですか。」

朝といったら3時とか、4時なんですね。昼間は暑いので昼寝してらるんですよ。夕方また仕事をしだすので、袋詰めとかが終わったら夜中なんですよ。そこからまた朝3時、4時でしょ。正直農業はしんどいだけの仕事だと思っていました。どうせやるんやったら組織にしないといけないと思

「それが、会社立ち上げの条件だったのですか。」

そうですね。分業制にして、若い人でも参入できるように農園、会社というのをつくりたいというのが、僕の思いでした。有機農業で環境とか安心・安全はもちろんですけど、魅力ある農業をして職業選択の一つに農業を考えるような組織にしないといけないと思

「平成23(2011)年に戻り、中身も人間関係も充実したわけですか。」

「それさえええから帰ってきてくれ」ということになりました。帰ってきてからしばらく経営体制や受注システムづくりを中心に行いました。平成25(2013)年1月に代表取締役に就任

「会社を立ち上げて、ご苦労も多かったのですか。」

いろいろありました。野菜を有機農法で作るといふのは、もちろん大変なんです。ただ、僕はそれよりも大変だったのは、この田舎で家業というのを企業にするというのが大変で、家族と地域の理解を得るのに本当に苦労しました。家族や地域からすると、農業は家族や人が増えるルール作りをする

「1年間の収穫量とか市場については。」

1日5000パックを収穫します。年間になると2200〜2300トンです。市場は全国で、オーガニック専門店とか、有機野菜を取り扱っているお店であるとか、小売店とか、レストランとか。最近では大手量販店でも専用コーナーを設けて頂くようになりました。



ハウス内での有機野菜の収穫作業

10種類の葉物野菜を柱に全国展開

「そうでしたか。ところで、現在の山口農園の生産品の特長は。」

会社にする時に、葉物野菜に絞ったのですが品目の柱はホウレンソウ、コマツナ、シロナ、春菊、サラダ水菜、ワサビ菜、ベビーリーフ、ルッコラ、チンゲンサイ、大和マナ



山口農園の従業員の皆さん